郵便配達屋さんより

冴島岐之

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
郵便配達屋さんより

【Ｎコード】
Ｎ１５９４Ｄ

【作者名】
冴島岐之

【あらすじ】
シリーズ。私はいつも、ラブレターを渡される。ただそこには、私宛てのモノがない。

郵便配達屋さんより

「なーんで今日こんなにいっぱいなのー？」

「明日が卒業式だからじゃん？」

なぜか毎度、私は数枚のラブレターを受け取る。でもそれは、かなしいかな、私宛てじゃない。

同い年で幼馴染の南は、モデルをしていたこともあるという母親似の端整な顔をしていて、当然ながら周りはそれを放っておかない。

明日は高校の卒業式。私たちは二年生だし、卒業するわけではないのだが、先輩たちからの熱いラブレターは殺到するわけで。

（でも多分、明日に比べればくそみたいなもんだ）

入学当初から頻繁に盗難にあっていた南だけに、

（闇オークションで高値で飛び交う消しゴムとか）

学校から特別に下駄箱にも鍵がかけられるようになった。それからというもの、私はこうして南に直接渡せない上に下駄箱にも置いておけない恋する乙女の郵便配達役に回っているのだ。

「読まないのー？」

「香里奈が呼んでくれりゃあいいじゃん、いつも通り」

「少しは自分でも見なさいよー、七通も来てるんだよ？」

それから明日の呼び出しが十四人に、おそらくまだ開けてない私

のカバンの中にも軽く二・三十通は詰め込まれているのだろう。毎日行きと帰りで重さが恐ろしいほど変わるのだ。

「お、ラッキーセブン」

「ごまかすなよっ」

「いーからいーから、ちゃっちゃと読んじゃって。一回くらい目通せっつったの香里奈じゃん」

「――たくっ」

こうして卒業式の前日、ラブレターを届けに南の部屋へ来た郵便配達屋である私の

「歯が浮くような乙女の愛の朗読」がはじまったわけである。

（いつものことだけど、それでも人のラブレターなんて恥以外のなんでもない）

「『ダーイスキな南くんへ』」

うわ、手紙なのに、ただの紙のくせになんか、キラキラピンクオーラがっっ

ま、まぶしいっ！！

え、なになに？

「『南くんはみんなの王子様』？

『でも私だけの王子様になってください』いいい！？」

うわ、何で私がこんなことを告白しなきゃいけないんだ！　断じてわわ、私はこんなこと思ってない、思ってないのにーっっ

「っくっ……負けた……っっ」

「お前、なにいってんだよ……」

今の今までベッドの上に転がり、雑誌を顔の上に置いて、完全に眠る姿勢だった南が、少しだけ雑誌を持ち上げて私へ視線を向けてきた。

あきれてるんだ、声でわかる。人が折角恥をしのんでラブレターを読んでやっているというのに、寝るなんて失礼な男だ。

「だってこれ、いつにも増して激しんだもん」

ほら、という感じにピンク色の、ハートのイラストが散りばめられたラブリーな紙をひらひらと南へ見せた。

こんなに体から離しても、あふれ出る乙女の恋心なのか、ピンクのオーラとハートがいくつも飛び出す幻覚まで見える。

これも卒業の魔力か、すごいな。

「だってお前、いつにも増して顔赤いんだもん」

「真似すんなよ、気持ち悪い」

「真似するよ、かわいんだもん」

だから、私はにやりと笑って見てくる南に自分でも恐ろしいほどのイライラを募らせる。

さあ深呼吸。

「黙れ、このえせ王子！！　あーもうっ！　どうして私がこんなの朗読しなきゃいけないのさっ！！　てめえで読めってんだ！」

「いいよ、俺は。香里奈はもーっと気持ち込めて読めよー」

「いやだよ！　どうして私があんたに恋する乙女の気持ちをこめなきゃいけないんだっ！」

「えー？　それはやっぱり、そうした方が伝わるから？」

「いっぺん死ね！　逝ね！」

はあ、すっきり。

「そんなに怒ってもかわいいだけだって。ほら、最後のそれ、読んでよ」

「……いいよ、これは」

「なんでだよ、それで最後でしょ？　ここまで来たんだから最後まで読んでくれてもいいじゃん」

いや、まあ確かにそうなんだけどね。

「わかった。じゃあ読むよ。えーっと、

『親愛なる魔王様へ

好きだ、バカ。

うぬぼれてんじゃねーよ、死ね。
でも好きだ、バカ。』

なにこれ？」

真っ白い便箋、今までに比べたら一番色気のない手紙。
今まで気持ち悪いくらいに充満していたピンクオーラなんて欠片も見当たらない。

「何それ、誰から？」

「匿名希望だって」

「ふうん」

これで解放される。そう思って私はふうっと息を漏らした。

「……じゃあ私、用すんだし帰るわ」

「俺、そいつと付き合おっかな」

「ええーっ！？」

気がつくと立ち上がった私の前に南はいて、最後に読んだ七通目の手紙をもって、にやりと笑いながら見ていた。

「え、な、なんで？　死ねとかいってんじゃん、その人」

「俺さ、この字に見覚えあんだよねー」

「へ、へー……」

やばい。まさか興味持つとか思ってなかったし。

「ほら、この無駄に達筆な感じ。お前もよく知ってんだろー」

「え、し、知らないなー」

なぜか一歩ずつ近づいてくる南に、私は次第に行き場をなくしていく。

気がつくと背中にドアがあった。開けたら逃げられる、でもかなしいかな、このドア、部屋の中に向かって開くんだよね。つまりこのドアの前にいる私が開けるには、スペースが足りないわけ。

「嘘いうなよ、匿名希望の香里奈さん？」

「わ、私がそんなもん書くわけないじゃん！！」

顔が熱い、絶対顔が赤くなってる、そう思いつつ、首を左右に振って全力で否定した。

「そうかなぁ。じゃあ、これは？」

そういうと、南は制服のポケットに手を突っ込んで一枚の紙を取り出した。

それはさっきと似たような白い便箋。そして、似たような筆跡。

「あ、あ、それって——」

「昨日ね、香里奈の部屋で見つけたんだー。下書き？」

私はあまりの恥ずかしさにボンッと音がするくらいに顔が上気するのがわかった。衝撃でゴンッと頭をドアにぶつける。

「なな、な、なに人の部屋勝手にはいってんのよーっっ！！」

しかもそんなもの間違っても拾うな！　っていうかなんで私はあんなもの書いちゃったんだ！　卒業だからいつもよりラブレター増えるだろうって、便乗するんじゃなかった。ああ、これも卒業の魔力なのか！　まんまと罠にはまっちゃったじゃないか！

吉井香里奈、一生の不覚であります。

「だってさぁ、窓が開いてたから、ね？」

「バカ！　死ね！　いっぺん地獄に逝ってこおおおい！！」

『ね？』じゃない『ね？』じゃ！　そんなカワイイ顔したって私はだまされないんだから！　ファンの人だったら卒倒かもしれないけど、私は大丈夫！　ちょっと鼻血出そうだけど……。うわぁ、やばい。

私の叫び声が驚くくらいに響き、家が揺れたような気がした。すごいな、今なら私、声のでかさでギネスブックに載れそうな気がするわ。

でも結局現実にそんなことは起きないわけで、ただの酸欠になっていた私は、ふらりと南の胸へ倒れこんでしまった。

「だからかわいーっていってんじゃん」

あー、これだから魔王様って性質が悪い。

||
E
N
D
||

教科書とにゃんこ

たまに、どうしようもなく不安になってしまう。いや、不思議に思ってしまう。

「ほら、香里奈。こっちおいでって」

「いいです、遠慮です」

「大丈夫だから、ほら。ね？」

ねっていわれても、無理。そんなこといってもどうせ聞いてくれる気なんてないんだから、いう気も失せてしまう。そう思いながら、手招きする幼馴染を見つめていた。もとはといえば、私はただ、貸していた教科書を取りに教室へ来ただけなのに。

「いい子だから、おいで？」

「いい子じゃなくていいんで、教科書、返してください」

「む、敬語なんて、許せねー」

あー、もう。うっかりため息。どうでもいいけれど、私は早くこの場から逃げたい。だって、周りからの視線がうざいくらいにイタイのだ。別に、悪意なんてこめられちゃいない。ただ、この幼馴染にどうしても集まってしまう視線だけは、私にはどうにもできないのだ。

「いいから、香里奈ちゃん。おいでって」

そういってさっきからしきりに自らの膝の上へ私を乗せようとしている幼馴染、南。多分、この状況、この熱い視線、すべてを楽しんでいる。

「……これだから魔王は、」

「なんかいった？」

「イエ、ナンデモナイデス……」

くそう。早くしないとお昼休みだって終わってしまうじゃないか。そうしたら、私は教科書なしで授業を受けなくちゃいけないのか。いや、それなら南を放っておいて他の人に借りたほうが早い。

ちらりと南を見た。奴は相変わらず私を見ていたらしい。キレイな顔してるよな。うらやましい。そりゃ、おモテにもなるさ。なんていうか、無差別フェロモン王子？

どうして私は周りの女の子（一部男の子も）のようにメロンメロンにならないのかって、多分、感覚が麻痺しちゃってるんだろう。一緒にいすぎた。

「もう、いいや。じゃね」

とにかく早くあの穴が開くような視線の集中地帯から逃げ出したかった私は、そういって教室を出ようとした。ところが、うまくはいかない。スカートの裾が引っ張られてしまったのだから。

「ちょ、やだ！　はなしてよっ」

パンツが見えるじゃないか！　私は掴んできた手の主を睨みつけ

ながら目でそう訴えた。ああ、泣きそうだ。この、ハレンチ王子！

「やだよ。そしたら香里奈は教科書どうするの？」

「別に、他の人に借りるもんっ！」

「だあーめ。借りるなら、俺のにしなさい」

「いいから！　はなしてよーっ」

「香里奈、」

「な、なにようっ」

急に真面目な顔つきに変わるから、ちょっとドキッとしてしまう。絶対意図的に使い分けてるよ、こいつ。なんてわかっていながらも、不意打ちには弱い。

「俺ら、付き合ってるんだよねえ？」

「え、ええっ！」

「何、その反応」

「え、いいです。お断ります。とんでもない！」

「はあ？」

いやいやいや。恐れ多くてそんなことできません。

「だって、無理！　いじめも集団リンチも間違いなしじゃん！　私はそんな人生わざわざ選びません！」

「いや、ダイジョブでしょ。今までだって何もなかっただろ？　被害妄想激しすぎなんだよ、香里奈は」

嘘だ嘘！　私が今まで無事なのは幼馴染だから！　都合のいい使い魔！　あくまで友達で害なし！　じゃなきゃ今ごろ生きていられません。

「俺がそんなに信用できない？」

「そういう問題じゃ、」

ない、といおうとしたら、南が席を立った。私より大きいために、急に視界が暗くなる。

「――っ、ふにゃあっ！」

「ふふ、ネコ？　なに、にゃあって」

なんでなんでなんで！？

なんか、ぎゅうぎゅう抱き締められている気がするのは気のせい？　っていうか、あの、

「あにゃ、け、けつ握んなっ！」

「えー？　スキンシップじゃん」

「嘘だ嘘！　っていうか全体的に、離せ！」

「ダイジョーブ。香里奈かわいいから」
「意味わかんない意味わかんない！」
頭爆発しそうだよー！　なんだこれ、なんだこれ。
「ダイジョーブだってば、落ち着いて、ねー？」
この状況でどうやって落ちつけってんだ！　うわ、やばい。視界にもやみたいなのがかかってきてるよ。あや、呼吸がうまくできない。
「香里奈？」
吸っても吸っても、全然足りない。
南の声がするけれど、めちゃくちゃ怒って怒鳴りつけてやりたいんだけれど、手の先からびりびり痺れているみたいで、全然力が入らない。
「え、ちょ、どうした？　香里奈っ」
「く、魔王が調子に乗るから、」
頭がぐらぐらしてる、そう思った。ふらっとする私の身体を南が支えてくれているから、なんとか立っていられた。
「え、ホント、大丈夫？」
「んも、教科書返しやがれ」

あ、結構大丈夫だ。まだ憎まれ口叩けるくらいの思考回路はまわるみたいだ。必死で睨みつけながらそれだけいった。

「――っ、かーわいー！」

「うや、」

どうしてこうなるんだ！

涙目でされるがままの私。さっきよりもさらにきつく、ぎゅうぎゅうぎゅうぎゅう、ない胸までもがぺったんこに押しつぶされちゃうんじゃないかと思うくらいにきつく抱き締められる。

視線が痛い。

「なに気にしてんだから知らないけど、香里奈ならダイジョーブだって」

「なにが、」

「子猫みたいでかわいーから、」

「うそつけ」

大丈夫。私にしか聞こえない声で、南が耳元でささやく。

「周り、見てみって」

いわれるままに、肩越しに見える周りの人たちの表情をうかがった。怖いな、そう思った。

「あ、あれ？」

なんだっけ、これ。なんだっけ。なんていうんだ。

そこにはなぜか、涙ぐんで拍手する集団がいた。『おめでとう』『よくやったね』『お幸せに！』

いやいやいや、わけわかんないんですけど！

「なんで、どうなってんの？」

「だって、香里奈」

香里奈が好きだから付き合えないって、俺が告白断るの、結構有名なんだよ？

そんな台詞、お願いだから耳元でささやかないで欲しい。

背骨がくだけて、体中の力が抜けちゃう。

「わかった？　子猫ちゃん」

わかりたくもないけれどね。っていうか、子猫って。

＝ＥＮＤ＝

窓辺の攻防　＊　1

来るなといったのは私だし、嫌いだといったのも私だ。
ただ、そんな簡単に手を放されるとは、思っていなかっただけなのだ。

それは、一週間も前のことだった。私と南は喧嘩をした。喧嘩だけなら、どうってことはない、日常茶飯事な出来事なのだけれど、今回は一味違った。
南が、怒っていた。

《南ー、手紙、持って来たよー》

《……いらね》

《なによ。折角持ってきたの、に、》

南の机の上にはなぜか、私の携帯電話が置いてあった。それは、私が昨日なくしたと思っていたものだ。おかげでその日は一日中、マナーモードでバイブもならない携帯電話を学校中探し回り、くたくただった。

《え、わ、私の、》

《生徒会室に落ちてた》

《え、》

《会長に告られちゃってさ。けっこうもてんじゃん》

《み、見てたの？　でも、私――》

《あいつのこと、好きなんだ》

《な、そんなこといってな、》

《帰れよ》

そういった南の顔が、今までに見たことないほど、怒りで歪んでいた。キレイな顔で睨まれるのは、それはそれはすごい迫力だった。今まで、南がそうして私に怒りをぶつけたことなんてなかった。そもそも南が怒るところなど、私は見たことがなかった。

《帰れ、目障り》

《な、なに、それ……》

戸惑った私は、そういって南に近づこうとした。すると南は、私なんか見たくもないんだとでもいうように、体ごと逸らせた。

《いつもみたいに、会長とメールでもしてれば》

《――っ、見たの？》

南は答えない。それを私は、携帯電話のメール見たのだと、判断した。

《最っ低！　あんたなんて大っ嫌い！　こっちだって顔も見たくな

いわよ。そっちこそ絶対うちに来ないでよね！》

そういって、南の部屋を飛び出したのが一週間前の話。

それから本当に、辛うじて学校で顔を見る程度だ。

＊＊＊

窓辺の攻防　＊　2

私はいつも通り、下駄箱とカバンに詰め込まれた乙女の恋心を持って帰宅した。それはいつもより数段重いような気がする。
南に渡せないでいるせいで、この一週間分、南へのそれは部屋にまでどっさりと溜まっている。

卒業式は、それはそれはすごい有り様だった。それはもう、女子の先輩方は我先にと南のところへ押しかけ、遠目で見る者までもが眩みそうなフラッシュの嵐。それに対し南は、いつも通り、笑顔を一瞬も絶やさずに、色気を振り撒いていた。
男性に向かって『色気』というのはおかしいのかもしれないけれど、とにかく『一生離さんぞ、こら』とでもいわんばかりに女心を鷲掴みにするような、なにかがあるのだ。

だから私は、南を魔王と呼ぶ。だってあれは、絶対わかっていてやっているのだ。なんて悪趣味な。

では、あの日南が私にいった言葉は、なんだったのだろう。
私が疑問に思うのは、そこだ。
南は私が書いたのだとわかっていて、『付き合おっかな』なんていう発言をしたのだ。
けれど現実に、私と南の間は以前とまったく変わらない。幼馴染兼、ラブレター配達人。男女問わず務まりそうな役柄しか、私には与えられていない。しかもそのラブレターの勢いも、一向に留まるところを知らない。

私って、なんなんだろうなぁ。

時々、南に向かって怒りながら、泣きそうになってしまう。私と会長がくっつけばいいようなあの発言も。

「ただいまー」

誰もいない家に向かって、声を響かせる。静かだ、私は大抵、一番に帰ってくる。

夏に向けて、少しずつ湿度も上がり、陽射しも強くなってきた五月下旬。家の中の空気は外に比べれば涼やかで、軽かった。

リビングに誰もいないことを確認すると、そのまま自室へ向かった。二階、階段を上がってすぐにある私の部屋は、ちょうど南の部屋の隣にある。窓を開ければ、部屋の中は丸見えだ。

後で、持っていかなきゃな。重いカバンを抱えながら、これまた重いため息を吐いた。

どうして、私はこんなに近くにいるんだろう。

このときほど、幼馴染であることを恨んだ日はない。

部屋の中に入ると、当たり前に、朝出たときと同じ状態だった。別に、汚いわけではない。ただ少し、トレーナーとジャージがベッドの上に放ってあるくらいだ。それから机の端の紙袋に詰め込まれたラブレターの山と。

なんか蒸してるな。そう思って、窓を開けようと閉めっぱなしだったカーテンを開けた。その先は、南の部屋。

あいつは今頃、バイトだろう。だから私は、カーテンを開けた。それから何も考えずに鍵を開ける。視界の隅で、何かが動いた。

「……あ、」

どうしてか、そこには南がいた。彼の部屋だから当たり前なのだけれど。窓の向こう、灯りのついていない南の部屋。南とは違う、人影。バイトはどうしたんだ。いろんな言葉がふつふつ沸き上がったのだけれど、その光景の前ではすべて、消え失せてしまった。

そして動けなかった。

「よかったー。先輩、帰ってください。あとはこいつに見てもらうんで」

「え、で、でも、」

南はいつものように、笑った。それは誰もが釘付けになる、微笑み。魔王様の得意技。

「あんたじゃ俺の相手にならないって、いったデショ」

有無をいわさず、先輩とやらは、なんとも素直に南の部屋、私の視界から姿を消した。

なにかいおうと思う前に、南と目が合った。南は少し苦しそうに眉を寄せた。

「そっち、いっていい？」

私は呆気に撮られて口を開けたまま、小さくうなづいた。湿った、でも部屋の中の空気よりはいくらか涼しい風が、やさしく吹き込んできた。

「どいて、入れない」

さっきよりもクリアに届く南の声。言葉が見つからない。

私は窓を開けるためにベッドに乗っかっていたけれど、急いでそこから降りた。そうしてすぐに、南の手が窓枠にかかったのが見えた。

「あー、危なかったー。俺、マジで襲われるかと思った」

けろっとそんなことをいって、私のベッドの上に降りると、そのままもぐりこんだ。

「ちょ、なんでそこで寝るのっ」

「静かにしてくれよ、俺、頭痛いんだって」

そういう南は確かに辛そうで、顔も赤い。さっき自分の部屋にいたときは、平気そうにしていたのに、声までもが急に鼻声に変わった。

「え……風邪？」

「ん、香里奈のせい。だから、看病よろしく」

「なんで私のせいなのよ、」

さっきまで、いつもと変わらない顔してたのに。不思議に思って、南の顔の位置にしゃがみ込んだ。南は私の方を向いて寝転んでいて、相当な熱のせいなのか、潤んだ目がこれまた妙な色気を出していた。

きっと、こんな南を見たら女の子達は卒倒もんだ。そしてそれは、男でもそうなんだろう。さっき、実感してしまった。きっとこんな南を平気で看病できる人なんて、南の両親とかうちの両親とか、私、くらいしかいないんだろう。

「だって、香里奈が心配させっから」

「――っ、もう。しゃべんなくていいよ、辛そう」

「わかる？」苦しそうだけれど、南は笑った。

「寝る」

「うん、」南の顔に手を伸ばした。すごく、熱い。黒い髪は、汗のせいかしっとりと濡れていた。

「無理、しないでね」

そういった時にはもう、穏やかそうな寝息が聞こえてきた。

私にできることって、なんだろう。

とりあえず今は、側にいてやんなきゃいけないな。強く、そう思った。

＝ＥＮＤ＝

子猫対決

「うひゃあああ」

部屋のドアが開いた、と思った瞬間、とても情けない声が聞こえてきた。

「めずらし、玄関から入って来るなんて」

部屋のドアを開けたお隣りさん、南を見て私はそういった。情けない声の正体、こんなに取り乱している南は、久しぶりに見るような気がする。

「で、なんか用？」

「おま、お前、それっ！」

「あぁ、この子ね。駅前で拾ったんだ。まだ子供で、かわいいでしょ？」

「うわああ！　やめろ、こっち来んな！」

「あ、南って、ネコ駄目だっけ。でもほら、かわいいよ？」

そういって真っ白くてやわらかい毛をしたその子を胸に抱いて、ドアでひどく驚いた、怯えたような顔をした南に歩み寄った。南は声も出ないといった様子で、首を左右に振って拒否している。

「……かわいーのに、」

だんだんと南の顔が青ざめていくので、私は途中で足を止めた。
私はその子の顔が見えるように抱き直して、
「お兄ちゃんは怖がりだねー？」と唇をとがらせて話し掛ける。
南がネコ嫌いなのは小さい頃から知っていたけれど、この年にまでなってこんなに嫌いだとは思わなかった。
「まさか、飼う、のか？」
「うん、許可はもらったし」
「駄目、絶対駄目！　今すぐ放せっ」
「やだよっそんな無責任なこと！　どうしてそんなことというの？」
折角拾ってきて、この子の家も決まって、それなのに今さら放り出すなんて無責任なこと。この子を捨てた親と同じ事をするなんて。
「南がそんな非常識な人間だとは思わなかった」
「うっ、」
真っ白い子猫を抱き締めて、南に背を向けた。にゃあ、小さく高い声で子猫は鳴いた。それをどうしようもなくかわいく感じて、喉の下を指先でくすぐった。気持ちよさそうに目を細める。
「香里奈、」
「何？　用がないんだったら帰って」

「香里奈っ」

私は完全に南の声を無視して、床に座って子猫と遊び始めた。トントンと私の膝を降りて、子猫は不思議そうに部屋を歩き始めた。ゆらゆらと揺れる尻尾がなんとも愛らしい。

「香里奈、ごめん」

「何が？」

にゃあ、と鳴いて、子猫はまた私の膝元へ戻ってくる。喉をやさしくくすぐると、気持ちよかったのかコロンと転がった。お腹の毛はさらに白くて、やわらかそうだった。

「駄目とかいって、わ、悪かった。だから、怒んないで」

「それだけ？」

「へ？」

「この子にもちゃーんと謝って」

そういって私は南にも見えるように体を動かした。南は子猫を見るとひっと短く悲鳴をあげた。

「ほーら、早くっ」

「う、わ、わかったよっ」

顔も体もかちこちにして、南は近づいてきた。右手と右足が同時に出てるな、と動揺している南がおかしくて思わず笑ってしまいそうになる。南は私のすぐ隣りに膝をついて座ると、恐る恐る寝そべる子猫に向かって手を伸ばした。

「す、捨てろみたいなことといって、ごめんな、にゃんこ」

ふるえる指で、それでもやさしく子猫をなでる。にゃあにゃあと子猫は気持ちよさそうに鳴いた。

「ふふ、ね、かわいいでしょ？」

「お……おう、」

まだ戸惑っている様子の南がおかしくて、私はそこで堪えきれずにふきだした。

「――っ、笑うな」

「だって南、か、かわいい」

「んな、」

お腹に手を当てて笑い続ける私をなんとか止めようと、南は意地になって睨んでくる。

「おい、笑うなっ」

「うわ、」

笑わないようにするためか、南は私の両頬を両手を使って押しつぶす。タコみたいになる、と思ったけれど赤くなって睨みつけてくる南のおかしさにはかなわない。

「わ、ら、う、なーっ」

「ムリー、」

「押し倒すぞ、この野郎」

「野郎じゃない、もん……っ」

気が付くと、いや、実はさっきからこれ以上ないくらいの至近距離で会話をしていた。いつのまにか両手を南に取られている。体勢も、一応向き合っている形のはずだが、南は私をまたぐようにして位置を取っている。

今さらになって、心臓が騒ぎ始める。

「ちょ、あ、にゃんこっ」

かまわれなくて不満になったのか、にゃあと子猫が鳴いて私の膝の上に乗っかってくる。それに気付くと南はぱっと手を放してすぐに距離を取った。

「あは、そんなに怖いの？」

「お前、俺が昔ネコにたかられたの覚えてないのかっ？」

「あー、またたびもたされてたんだっけ、動物園みたいなとこで」

「あんなんいっぺんに来られたら恐怖以外のなんでもねーよっ！」
「でもさー、単品ならかわいいしょ？」
「……猫は香里奈がいるからもういらねーの」
「へ？」
にゃあ、また子猫が鳴いた。いつのまにやらまた至近距離にいる南、
「かわい」くすっと笑ったかと思うと、そのまま触れるか触れないかのキス。
「あんまからかうといじめるよ？　子猫ちゃん」
睨まれてる、違う、魅せられてる。不満げににゃあともう一度高く鳴いたネコを、南はびくつきながらも抱き上げた。
戸惑いながらも子猫と楽しそうに遊ぶ南に、不覚にもときめいたことは内緒だ。
＝ＥＮＤ＝

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1594d/

郵便配達屋さんより

2010年11月13日15時02分発行